

## 九州大学政治哲学リサーチコア編『比較社会文化叢書VI 名著から探るグローバル化時代の市民像—九州大学公開講座講義録一』

日下, 渉  
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/16467>

---

出版情報：政治研究. 55, pp.207-208, 2008-03-31. 九州大学法学部政治研究室  
バージョン：  
権利関係：

九州大学政治哲学リサーチコア編

『比較社会文化叢書VI 名著から探るグローバル化時代の市民像——九州大学公開講座講義録——』

(花書院、二〇〇七年、二二九頁)

本書は、二〇〇七年に九州大学政治哲学リサーチコアが実施した市民公開講座の講義録である。ゲスト一名を含む九名の論者が政治学の名著を採りあげて、今日のグローバル化時代において求められている市民像を探究している。

「アリストテレス『政治学』を読む」(関口正司)は、現代の市民像にも、共同性や公共性の捉え方と個々の人間の生の意味との関連という難問が存在していると指摘する。そして、アリストテレスの場合、ポリスの公共性を濃密に捉え、それを生き甲斐とする市民の意識を与件とすることができたため、政治的安定の条件の解明に集中することができたのだと主張する。

「福沢諭吉『文明論之概略』を読む」(佐伯啓思)は、文明を「人民の気風」と捉えた福沢が、後進文明の課題は自国の独立であり、その手段として西洋文明の受容が重要だとしたことを指摘する。そして、文明国になれば未開の国を支配しても良いとした福沢の議論は、近代日本の宿命的な文明の間

題を表していると主張する。その上で、市民社会の形成によって人民が自分の国を守るという気風を持つことが重要だと主張する。

「トクヴィル『アメリカのデモクラシー』を読む」(鍋木政彦)は、トクヴィルが「多数の暴政」としてのデモクラシーの危険性を認識しつつも、デモクラシーの下で自由と安定を確保する条件として地方自治、司法的活動、結社を重視したことを指摘する。その上で、現代人は自由の危機に対して鈍感になっており、個人が他者と一緒になって自由をつくりあげていく契機が重要であるとする。

「リップマン『世論』を読む」(木村俊道)は、人間はそもそも非合理的で可謬的な存在であると見なし、想像された「世論」がデモクラシーを機能不全に陥らせていると見なしたリップマンの議論を紹介する。その上で、リップマンが市民の統治能力に悲観的であった半面で、ステレオタイプや人間の可謬性の自覚が、寛容性や批判精神の育成に重要であると見なしていたことを指摘する。

「アンダーソン『想像の共同体』を読む」(石田正治)は、ナショナリズムが、近代的個人に同朋意識を作り出すことで、民主主義が健全に機能するための基盤を提供しているとする。その一方で、グローバル化時代では「われわれ」ではな

い「彼ら」とつきあうことが不可欠であるため、国家が唯一の帰属対象であるとする感情を相対化することでナショナリズムの排他性を緩和していく可能性を指摘する。

「アガンベン」「ホモ・サケル」を読む」（竹島博之）は、市民としての法的権利を奪われた「例外状態」に属する人々を指す「ホモ・サケル」という古代ローマの概念を、アウシュビッツや難民といった現代政治の分析に適用するアガンベンの議論を紹介する。そして、「例外状態に住まう難民」を市民の範疇とみなし、単なる定住を要件に同等の法権利を与えることを将来のシテイズンシップとする彼の構想は、重要な問題を提起しているとする。

「フロム『自由からの逃走』を読む」（岡崎晴輝）は、『自由からの逃走』を、我々のデモクラシーに潜むファシズムの危険を、デモクラシー自身によって克服することを提唱した書として捉える。つまり、フロムは消極的自由だけでは孤独感、無力感に苛まされるが、積極的自由を同時に志向することによってそれを克服できると主張しているというのである。その上で、現代日本社会に宿るファシズムの契機に対する自己反省と、自己克服を呼びかける。

「エーデルマン『政治の象徴作用』を読む」（大河原伸夫）は、直接的に経験されない政治の世界では、感情を表現し喚

起する抽象的言語が「凝集的象征」として大きな役割を果たし、政治が心理的満足の手段になるとしたエーデルマンの議論を紹介する。そして、政治の中の抽象名詞について、その本来の姿と機能の有無を問うことで、それらが凝集的象征にならないようにし、政治を「具体的環境を作りかえること」にしていく手段を主張する。

「ベネディクト『菊と刀』を読む」（施光恒）は、他者を基準とする「恥の文化」を持つ日本人は権威に弱く同調的で自律的でないとするベネディクトの議論を批判的に検討し、日本では、多様な他者の視点を内面化することで既存の自己を絶えず修正・洗練していく反省能力としての自律性の概念が存在してきたと主張する。その上で、自律的市民になるために、手持ちの文化的土壌を活かすことを提唱する。

本書の論点は多岐にわたっているが、一貫して窺える問題意識は、グローバル化時代と言われる複雑で拡大した現代社会において、限定的な合理性しか持たぬ可謬的存在としての人間が、いかなる市民としてデモクラシーに貢献できるのか、というものである。本書が提示した幾つもの重要な論点は、理論的であると同時に実践的でもある。本書は、多くの市民に読まれることで、現代日本のデモクラシーに貢献していくことができるだろう。

（日下渉）